
歴史を取り戻せ！！

雛 ヒヨコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歴史を取り戻せ！！

【Nコード】

N1932W

【作者名】

雛 ヒヨコ

【あらすじ】

変わってしまった歴史を元に戻すために、タイムスリップした桜の見たものは！？

ちよー仲のいい源氏と平家。

野心の無い戦国武将達。

が幕末にだい集結！？

果たして、歴史は元に戻るのか！？

序章

可笑い。

何かがおかしい。

一体、この一週間で何が起つたのだ？

桜は、違和感を感じながら大学院へむかった。

沖田 桜 19歳。

たった16歳で博士号を獲得した、天才。

今は、日本の歴史を専門に研究する教授。

今日まで、学会の発表のために、家にこもって、論文を書いていた。

やっぱり、何か違和感がある・・・

桜が辺りを見回していた時。

「沖田君」

少し、しわ枯れた、けれど耳馴染みのいい声が桜をよんだ。

「豊田博士、お久しぶりです。どうかされたんですか？」

桜の博士時代の恩師の豊田 惇が切羽詰まった顔で立っていた。

「君にしか、頼めないことがあるんだ。」

教授と博士

「私にしか、頼めない事？　なんででしょう？？」

頼まれたら断れない性格の桜は、博士の話を二つ返事で聞くことにした。

*
*
*
*

•
•
•
•
•

桜は今、博士の研究室で、紅茶を飲んでいた。

なかなか、話し出さない博士をじっと見つめる。

そうしていると、博士は覚悟を決めたように話し出した。

「僕は、歴史を変えてしまったかもしれない……いや。変えてしまったんだ。」

[illegible]

博士時代の先輩の爆弾発言に、桜はついに、頭がおかしくなってしまうのか、と失礼なことを考えてしまった。

「別に、頭がおかしくなっただけではない。」

そんな、桜の気持ちを知ってか知らずか、博士は訂正して語りだした。

タイムマシン！？（前書き）

遅くなりました。

今度からはもう少しマメに更新します。

タイムマシン！？

「君がまだ、研究室にいた頃、時間を遡る、タイムマシンを作る研究をしていただろう。」

覚えているかい？

教授が聞いてくる。

馬鹿にし無いでほしい、覚えているに決まっている。

私が研究室をでる、きっかけになった、研究なのだから。

16歳の幼い私にとって、博士達の研究は馬鹿げたものだった。

それなりに、博士達の事は尊敬していたけれど。

時間を遡るとか、あり得ない事に時間を費やす博士達は、当時の幼い私にとっては信じられない、事だった。

同時に研究者と言う仕事は私に向いて無いんだなと実感した。

「はい。覚えています。」

「実はな、君が残した、時間の流れと速度の分子の研究レポートのおかげで、つい、七日前タイムマシンが完成したんだよ。」

ああ、あのレポートが・・・

桜は、なんと無く納得した。

研究室を去る前に残したレポート、あれは自分でも完璧と言えるほどの出来栄えだった。

「わしらは、浮かれすぎていた。とんでもないことをしでかしてしまっただんだ・・・」

過去へ

「まあ、とにかくタイムマシンをみてくれたまえ」

一通り話した後、博士はタイムマシンがある所へ桜を誘導しようとする。

博士の話は、信じられないものであったが、元研究員である桜は”知りたい”

という、好奇心にはかてなっかた。

博士が連れてきたのは、研究室の一角だった。

そこにあったのは、ミニのロケットのようなもの。

「これですか・・・」

タイムマシンだと言うものを目の前にして、やっぱり好奇心には勝てない桜は、

警戒しながらも、中に入った。

その時!!!

————ドン!!!!!!

桜は背中を押され、何かのスイッチを押してしまった。

「えつつつ」

「時代を戻してくれ！！頼んだよ沖田君！」

背中あお押したのは、言うまでもなく博士、
そして、桜の返事も待たずドアが閉められる。

「えっちよつと！！！！え~~~~~」

桜の意味にもならない、講義もむなしく。
桜の視界から博士は消えていった、否。
桜が消えたのだ。

右も左も

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

桜はさくらの並木が並ぶ丘に立っていた。
信じられない、光景に声が出ない。

丘の下に見えていたものは、正しく、桜が研究している、江戸の街
そのものだっただ。

「うそ・・・・・・・・そんなことって・・・」

本当に、時を超えてしまったのだ。

「ありえない」

研究していたとはいえ、過去は過去。

桜は右も左も分からない過去に一人放り出されたのだ。

「ありえな～～～い」

桜はただ、ただ叫ぶしかなかった。

いきなり遭遇！

「ハア・・・ハツ・・・」

一通り自分の立たされた状況を嘆いた桜は、いつまでも嘆いて居るわけにはいかないと、丘を下っていた。

皮肉な事に、洋服からお金、家の地図までタイムマシーンの中にあつて、やるしか無い状況だった。

最も桜自身、最初は戸惑ったものの研究者の探究心と好奇心で降りるつもりだった。

「ふーやっとなつたあゝって！！！！ここはあゝ」

桜はあまりの嬉しさに周りをキョロキョロと見回した。

不意に冷んやりとしたものが、喉元に当てられる。

「女、ここで何をして居る。」

「ダメだよ一君、女の子にそんなもの突き付けちゃあいくら、ココが女人禁制の新撰組の屯所の裏でも。」

そう、丘の下には新撰組の屯所があつたのだ。

本当に江戸時代？

「ダメだよ、一君女の子にそんなもの突き付けちゃ、たとえココが女人禁制の新撰組の屯所の裏でも。」

「・・・・・・・・」

そう言った彼の目は笑ってない。
危機的な状況だ。

けれど、桜はそれどころではなっかた。
あまりの事に、声が出ない。
視線を一点で固定して動かせない。

「これが気になるのか？」

そんな視線に気付いたのか、男が訪ねてくる。

「あらら、一君ってば、直ぐ自分の武器自慢したがるんだから」

「これは、猟銃だ、まだココでは珍しいが・・・・・・・・」

「ち、違う、違うくて。そうじゃ無くて。何、何で銃？？貴方、斎藤一でしょう！居合の達人なんじゃ・・・・・・・・」

「！！！！！！何で俺の名前を知っている。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932w/>

歴史を取り戻せ！！

2011年11月29日12時49分発行